



TITLE:

讀者欄：寄書歡迎

AUTHOR(S):

CITATION:

讀者欄：寄書歡迎. 天界 1935, 15(170): 313-314

ISSUE DATE:

1935-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167029>

RIGHT:

讀者欄 寄 書 迎

文藝欄の新設を喜ぶ

宇 野 生

最近「天界」が編輯氏の御盡力により新味ある讀者欄やロ 1 マ字の天文欄等を持つ様になり、ぐつと読み易い親しみ易いものとなり喜びを感じてゐたところ、此度は更に文藝欄が新設される事になり四月號からその作品が誌上に現はれて來た。吾等は大きい喜びと期待を以てこれを迎へるところである。

古來天文と文學が如何に密接な關係をもつものであるか!!と云ふ様な事は小生如きが語るべき筋合のものではなく、亦今更喋々する必要もない事であらう。悠久極みなき大自然と儚き人生!!春の淡き月、亦煌々たる秋の月、燦々たる群星の輝き、亦微睡むが如き星の瞬き!!それに幾多の人が哀情を抱き喜悅と歡喜を與へられ、そこにどれ程多くの詩や歌が生み出された事であらう?

文明都市の物質に凝り固まつた生活を持ち、大きな金融經濟機關の一細胞として帳簿とペンに齧付き無味乾燥な數字の羅列に日を送る自分なればこそ尙更大自然の星の詩に愛着を覺えるのであらうか、花の春のおぼろ月夜に、秋の夜の冴へた大空に銀砂の如く輝く星々に、天の河と牽牛織女のロ 1 マンスに、誰もが詩情をもよほし、たとへ禿筆であれ手にとりたくなるものではないからうか。

「天界」が固くて難かしいと云はれる人があるさうである。多分それ等の人々は別に觀測とて行なつてゐられず亦難かしい數學や理學の天文學の研究に苦しまれず、唯漫然と天の神より與へられた、み空の花なる星や月の美を眺めその麗はしさに酔ひそれに纏るロ 1 マンスなどに興味を覺え、それで人生を潤ひのあるものとし満足してゐられるのではないだらうか………自分はそんな星好きの友を幾人も持つてゐるし、自分も幾分かはそんな氣持を持つてゐる………その人達にとつては「天界」の天文論文、研究文、觀測報告等は確かに固いものであり難かしいものであり「天界」は讀むところが少ないものであつただらう。しかし此度星の文藝欄が誌上の花として新らしく出來た。

全くそれ等の人達にとつて打つてつけのものである事と思へる。憧れの星に對する折々の感情を筆に託し、亦同じ様な星の友の筆のすさびを誌上にみる事が出来る。それ等の人は文藝欄ゆえに今後の「天界」が待遠しいものとなるであらう。

亦實地觀測を行なはれ深く天文學研究に進まれてゐて研究的態度で「天界」を讀まれてゐる人々でも、理論と數字の間に挟まれたさゝやかな文藝欄を開かれた時、丁度電車自動車が織なす様に疾走し、空は日を覆うばかりの大ビルデングが楕比する大都市の街角に色とりどりの美しい花束を手に純白のエプロン姿可憐な花賣娘でも發見した時の様な歡喜と慰安とを與へられる事であらう。

文藝欄に載せられる文藝作品が同じ天文同好者であり星の友である東亞天文協會の會員によつて書かれるものである事も「天界」と會員とを結びつけ、會員お互の交際を起す機會をつくり、會員相互の心からの懇親となるものであらう。時は春、希望に満ちた文藝欄の誕生を喜び、その輝やかなしい未來へのすこやかなる發育を祈るものである。(昭和十年四月)

東亞天文協會諸兄姉に!!

先日もぶらりと、花山へお邪魔して高城先生のお手を止めながら、何彼と色々お話を伺ひましたが、いつもながら話題に上るのは「天界」のこと。

表紙を今少し綺麗な印刷にして欲しいだの、もつと記事を殖やして貰ひたいだの等々。さんざお願いしてみましたが、先生のお話では、「成程立派にしたいのはお互に最も切望するところですが、費用の關係上これ以上希望を活かすことは出来ぬ」とあつさり片付けられて了ひました。

で、小生思ひますのに。

費澤は勿論望まぬところですが、もう少し氣の利いた装幀を施し、内容もニュース、講座などを可成澤山取り入れて戴けますまいか。

その經費は、在來會費3圓だつたのを、5圓に増額して戴いては如何。

幸ひ天界169號に、第十六卷より大改正「天文雜誌」發刊の旨が記されておりましたから、茲につゝしみて會員諸兄姉に御相談お願い致します次第です。

(不器生)